

目的は、非常にわかりやすい。それは、暮らしやすい街づくりというところにある。その暮らしやすさとは、単に公害がないというようなものではない。住民の心の安定も含めてのものである。エコミューズを設立した「あおぞら財団」の設立趣意書にも、その考えは明示されている。

公害地域の再生は、たんに自然環境面での再生・創造・保全にとどまらず、住民の健康の回復・増進、経済優先型の開発によって損なわれたコミュニティ機能の回復・育成、行政・企業・住民の信頼・協働関係の再構築などによって実現される

「コミュニティ機能の回復」「行政・企業・住民の信頼関係の再構築」などの言葉に地域の受けた精神的損傷の大きさが察せられるが、それを踏まえてか、報告者は、あおぞら財団が目指す最も大事なこととして、「みんなとつながる」ことを挙げている。(少しセンチメンタルにも映るかもしれないが、私には、この感覚こそが新鮮で、最も学ぶべきことのように思えた。)

そして、目的がわかりやすいために、その活動もまたわかりやすい。例えば報告者は、つらかったことを語るのには易しいが運動について説明するのは難しいと言う患者に対し、だから運動資料は保存しなければならないのだと説得を行った。また、運動のことは後世に伝えたいと思うが運動資料の保存には関心を示さない患者に対し、資料の展示を行うことによってその重要性を理解させた。これらの活動は、資料保存の重要性を住民に極めてわかりやすく説くものである。

さらに、収集した資料をもとに環境教育や街歩きを行っているが、それは、資料の利用価値を住民にわかりやすく示すものである。そしてそれは、結果として、「暮らしやすい街づくり」という目的に向かっている。つまり、エコミューズは、目的が明確で、また活動も

## 司会者はこう見た

大分県立先哲資料館 村上 博秋

参加者が少なかった(約40名)のが本当に残念であった。一方の第1分科会が文書館の設立(あくまで機能の整備という観点か)に関する報告で、それが公文書管理法成立という時宜に適うものであったということもあろうが…。

しかし、本分科会もまた、文書館の設立という問題について考える有意義な場になっただけである。なぜならば、本報告が、文書館設立の「目的」について強く意識させる内容だったからである。

本報告で紹介された「西淀川・公害と環境資料館(以後エコミューズと呼ぶ)」の設立の

その目的に向けて明確なのである。

もちろん、エコミューズの活動も万事順調ではないだろう。それなりに課題もあるはずだ。しかし、それでもエコミューズに学ぶべきは、文書館の目的と活動を他者にできるだけわかりやすく伝えようとするその姿勢である。文書館は他者の評価によってその存在意義が語られることが多いはずであり、このことは絶対に無視できない。

本報告は、文書館設立の根本を見つめ直す契機となるものであり、だからこそ、多くの方に参加していただきたかった。私も興味を覚えたので、機会があれば一度訪れたいと思う。なお、1つ気がかりなのは財政事情であるが、エコミューズでは「ハモン（波紋）基金」という形で寄附金を募っているとのことであり、それを最後に紹介しておく。